

第5章 ナツテイルによる単純状態の叙述⁽¹⁾

1. はじめに

前章では自動詞ナルが一見したところ主体の変化を表さない用法について考察した。日本語における自動詞的表現への指向の強さという点に、ナルの意味的な透明性という要因も加わり、ナルがその意味領域の内部に多様な広がりを見せていることがわかった。

本章は自動詞ナルのテイル形の意味に注目する。特に、ナツテイルの文が単純状態を叙述する場合（つまり、時間軸の展開に沿った主体の変化の結果を述べていない場合）をとりあげ、この種のナツテイルの文に具体的にどのようなパリエーションがあるのかを分析・記述する。また、通常の変化の結果を述べるナツテイルの文との関係やこのような用法が可能であることの背景などについても考察を試みる。

2. 問題の所在

日本語の動詞テイル形のアスペクト研究にはすでに膨大な蓄積がある。しかし次にみるように、基本的には、動作主体の動詞の場合は動きの継続を、変化主体の動詞の場合は変化の結果の持続を表すという点が共通の理解である⁽²⁾。

(1) 太郎がグラウンドを走っている。

(2) 窓ガラスが粉々になっている。

(1)は動作主体の動詞の例である。この例では、「走る」という動きが継続していることを表している。(2)は変化主体の動詞の例であり、「粉々になる」という変化の結果が持続していることを表している。

ナルは変化自動詞の典型ともいうべきものである。従って、ナツテイルの文は変化の結果の持続を表すはずであるが、実際には以下のように、単純な状態を叙述するものもみられる。

(3) サッカーのゴールポストの側面は丸くなっている。

(4) 小さな森の繁みがこの屋敷の境になっている。

(5) すべすべに磨きをかけてある御影石の墓は、閃光に当たった面だけざらざらに焼け爛れ、光の当らなかつた方は元のまま滑らかになっている。

(黒い雨343)

(6) 海岸のある部分は、乳色の砂浜であり、また他の部分は黒い石ころのつみかさなつた入江になっています。(沈黙186)

これらは普通は何らかの変化の結果の状態を述べているとは解釈されないものである。(3)は「元々は丸くはなかつたサッカーのゴールポストが変化して丸くなつた」という解釈は通常はされず、単に現在の状態を述べていると解釈される。

(4)も同様で、「小さな森の繁みが屋敷の境としての役割を果たしている」という現在の状態のみを問題にしている。(5)は非常に興味深い用例である。この例では、変化を被らなかつた部分に関して「滑らかになっている」という変化動詞のテイル形を使っている。よく考えてみると説明の難しい興味深い現象であるが、よほど注意深く観察していない限りその問題に気づかないほど自然な文である。(6)における「入江になっている」も現在の状態のみを述べているという点で同様であ

る。

これらの単純状態を叙述するナツテイルの文には、変化の結果の持続を述べる通常のナツテイルと以下のような点での異なりがみられる。

(7) a グラスが粉々になっている。 (変化の結果のナツテイル)

b グラスは粉々になった。

c グラスはもう粉々になっている。

(8) a 海岸のある部分は入江になっている。 (単純状態のナツテイル)

b *海岸のある部分は入江になった。

c *海岸のある部分はもう入江になっている

まず、(7a-b)と(8a-b)を比べてみよう。(7a)の変化の結果を述べるナツテイルの文は、その意味と平行する形でアスペクト形式の無標のタ形に換えることができる⁽³⁾。他方、(8a)における単純状態のナツテイルはこれが不可能である。つまり、単純状態のナツテイルの文が叙述する事態からは変化の瞬間を想定することができない。また、(7c)と(8c)を比較するとわかるように、変化の結果のナツテイルの文は副詞「もう」と共起可能なのに対し、単純状態のナツテイルの文は共起不可能である⁽⁴⁾。これは単純状態のナツテイルの文が時間軸の展開に沿った変化の結果を述べていないことに由来する現象である。

本章はまず、単純状態を叙述するナツテイルの文について、具体的にどのようなバリエーションがあるかを分析・記述する。また、通常の変化の結果を述べるナツテイルの文との関係やこのような用法が可能であることの背景などについても考える。

3. 認知的観点からの関連する研究

管見の限りでは、本章が考察の対象とする単純状態を叙述するナツテイルの文を専らの考察対象とした先行研究はない。しかし、認知言語学的観点から本章の考察対象をも含む単なる状態を述べるテイル形の文について考察した研究はいくつかあげることができる。本節では、特に本章での議論と関連が深いと思われる国広(1985)とMatsumoto(1996a)を取りあげ、その概要を検討し、本章の考察対象を考える上での問題点を明らかにする。

3.1. 痕跡的認知：国広(1985)

国広(1985)は言語表現と認知の関係の全般を論じたものである。その中で、次のような現実的には動きの認められないテイル形の文の例をあげ、「痕跡的認知」という概念からこれらを説明している。

(9) 駅前に町の主だった建物が集まっている。

(10) 町の一角には土産物店がかたまっている。

痕跡的認知とは、「客観的に見れば物の動きはあり得ないのに、あたかも動いたかのようにとらえている」(p.8)ことである。(9)の例で言えば、元々は他の場所にあった「町の主だった建物」が「駅前」へと動いたとは考えられないが、話者はあたかもそのような動きがあったかのようにとらえているということである。

この研究の功績は、認知的観点を導入することによって現実には動きがあったとは思われない事象を叙述する文について、動きの要素を認めた点にある。ただし、この場合の動きとは現実世界におけるものではなく、我々の心の中の動きである。すなわち、言語表現の分析に心内のプロセスという視点を取り入れたとい

う点で意義のあるものである。

3.2. Subjective Change: Matsumoto (1996a)

Matsumoto (1996a) は、ナルをも含む変化自動詞のテイル形の文の変化の結果を表さない場合を扱っている (6)。従って、本章の考察対象である単純状態のナツテイルもその射程に含むものであるが、決してナルという単独の語彙項目に注目したものではない。この論文は国広 (1985) においては特に区別されていなかった現象を subjective change のタイプと subjective motion のタイプに分類する。Subjective change のタイプとは、日本語の現象としては、本章の考察対象をも含む変化自動詞のテイル形の変化の結果を述べない場合に相当するもので、Matsumoto (1996a) における主たる考察対象である。これに対し、subjective motion とは、日本語の現象としては動作動詞のテイル形の文が単なる状態を叙述する場合などがこれにあたり、われわれの視線の動きが関わっていると考えられるものである (6)。

Matsumoto (1996a) は次に示すような変化の結果を表さない変化自動詞のテイル形の文の例をあげ、subjective change という概念からの説明を試みている。

(11) a その部屋は丸くなっている。

b #その部屋は四角くなっている。

(12) a ??右上の角が丸い四角。

b 右上の角が丸くなっている四角。



(11) と (12) の例文は判定も含めてそのまま引用したものである (ただし原文はローマ字による表記である)。Subjective change とは、「何らかの期待や基準から

の逸脱 (the deviation from expectation or norm)』 (p.125)として特徴づけられるものである。また、「Subjective changeの表現はメンタル・スペースにおける変化の過程に基づいている (Subjective-change expressions are based on the process of change in a mental space)」 (p.133)と指摘している。#の印が付された(11b)については、「もしも話者が部屋が丸いものであると考えていたらこの文は容認可能である (This sentence is acceptable if the speaker has somehow expected the room to be round)」 (p.151)と注釈をつけているが、普通に解釈すれば許容されない文であるとしている。つまり、一般的な認識として、「部屋は四角い」という期待(もしくは基準)があり、そこからの逸脱が認められる(11a)は自然な文であるが、逸脱の認められない(11b)は不自然であるという見方をしている。また、例文の右に示した形状を叙述する場合、普通の正四角形を基準としてそれからの逸脱としてこの形状を認識するため、(12b)の方が自然な文であるとしている。

この研究も単なる状態を叙述するテイル形の文の分析にある種の心内のプロセスという観点を用いているという点で、国広(1985)と軌を一になすものである。

3.3. 単純状態のナツテイルを考える上での問題点

上に述べたように、これらの先行研究は特にナツテイルという形式に注目したものではないが、本章が主たる考察の対象とする単純状態を叙述するナツテイルをもその射程に含むものである。それでは、本章の問題を考えるにあたって、これらの研究にどのような問題点があるのかを検討しよう。

国広(1985)の「痕跡的認知」の概念から検討する。本論はこの考え方を否定するものではないが、「話者があたかも動いたかのようにとらえている」という説明は、本章の問題を考える上ではやや具体性に乏しいように思われる。例文をみ

てみよう。

(13) ドゥー川がその平野と町との境になっている。(赤と黒573)

(14) 堤防と云っても現在水の流れている所までは一里程もあって、その間は真菰の生い茂った広々した沼地になっている。(小僧の神様139)

(15)a この鉛筆は長くなっている。(Matsumoto(1996a)より)

b ??あの人は足が長くなっている。

(13)の例に関して、「ドゥー川がその平野と町との境に変化したとみなしている」と言っただけでは、この現象を十分に理解したとは言いがたい。(14)についても同様である。また、次節以降で詳細に観察するように、この種のナッテイルの文には様々な成立上の制約がある。単純状態を叙述するものとして解釈する場合、(15b)は(15a)に比べると許容度が落ちる(7)。つまり、痕跡的認知の概念からだけではこの種の表現がどのような条件に支えられて成り立っているのかを十分に理解することは困難なのである。

次にMatsumoto(1996a)の subjective changeの観点について考えてみよう。この概念は(12b)のような図形の認識のパターンなどを説明する際には一定の説得力をもつが、(11)などのような現象を考える上では問題が残る。次の例を検討しよう。

(16)a やはりその部屋は普通の部屋と同じように四角くなっている。

b どここの文化圏でもたいてい人間の住む部屋は四角くなっている。

(16a)や(16b)は「基準や期待からの逸脱」という特徴付けが意味を成さないものであるにもかかわらず、「四角くなっている」という言い方に不自然さが全く感

じられない。また、(15a)と(15b)との自然さの度合いについても説明を与えることができない。従って、subjective changeの概念は単純状態のナツテイルの文のすべてについて十分な説明を提供しうるものではないのである。

本章は上に述べたような問題点をふまえ、単純状態を述べるナツテイルの文の成立を支える要因を明らかにする形で、この現象をより精密に分析・記述していく。

4. ナツテイルの諸側面

本論は単純状態を叙述するナツテイルの文を「とらえられた状態に対する解釈」という観点から概観する。この種の表現が使われる場合、話者は視覚や聴覚などによってとらえられたある状態に対して何らかの解釈を加えているものと思われる(8)。より具体的には、当該の状態を解釈することによって、その原因・理由、機能、構成を述べる場合がある。

4.1. 原因・理由の含意

まず最初に、ナツテイルの文がとらえられた状態の原因や理由を含意する場合をみる。以下の例では「人為」や「ある状態の原因や理由」を読み取れない場合には成り立ちにくいことがわかる。

(17) a この鉛筆は長くなっている。 (= (15a))

b ??あの人は足が長くなっている。 (= (15b))

(18) a この携帯用のカメラはとても軽くなっている。

b ??太郎の体重はとても軽くなっている。

(19)a (高い木の葉を食べられるように) キリンの首は長くなっている。

b ??あの人の首は長くなっている。

(20) やはりその部屋は普通の部屋と同じように四角くなっている。

(= (16a))

(17b)、(18b)、(19b)が無理なく解釈できるとしたら、変化の結果を述べる場合であり、単純状態を述べるものとしてはいずれも不自然である。(17a)における「鉛筆」や(18a)における「携帯用のカメラ」のように、その状態に人為の関与が解釈できるものは単純状態のナツテイルとしてごく自然である。他方、「足」や「体重」のような人為の関与の解釈が困難なものは不自然である。同様に、(19)の両文はともに「首は長くなっている」という叙述であるが、(19a)のようにその状態の理由や目的を述べる文脈においては自然である。これは、とらえられた状態に対する原因・理由の解釈という一種の心内のプロセスがこれらの文の成立に関与していることを示唆するものである。また、(20)は部屋の形状について述べるものであるが、既にみたように特に期待や基準からの逸脱という意味が読み取れなくとも、ごく自然である。これは部屋の状態(形状)に対して人為が関与していると解釈することが容易であることによるものである(9)(10)。

更に、ある状態の理由や目的を述べる文脈におけるナツテイルの文と形容詞文や名詞文との違いをみてみよう。

(21) 選手が激突しても怪我をしないように、サッカーのゴールポストは
{丸くなっている / ?丸い}。

(22) 水の中でなるべく抵抗を受けないですむように、多くの魚の体は{流
線型になっている / ?流線型だ}。

(21)ではナツテイルの文と形容詞文を、(22)ではナツテイルの文と名詞文を比較している。いずれもナツテイルの文の方が明らかに自然である。形容詞文や名詞文も何らかの状態を述べるという点でナツテイルの文と共通するところがあるが、状態の理由や目的の含意の有無という点では明白な違いがあるのである。

4.2. 機能の叙述

次にナツテイルの文が単にとらえられた状態を述べるにとどまらず、それが有する機能を主体的に解釈している場合をみてみたい。次の(23a)と(24a)はともにその例である。

(23) a これらの低木が道ばたの生垣になっている。

b これらの低木が彼が写生をした場所{*になっている/である}。

(24) a ドゥー川がその平野と町との境になっている。 (= (13))

b ドゥー川が子供の頃に魚釣りをした場所{*になっている/である}。

(23a)の文において、話者が実際に現象としてとらえているのは道ばたに低木が立っているという状態だけである。しかし、単にとらえられた状態を述べるにとどまらず、それに対して「生垣」という機能を主体的に解釈している。これに対して、(23b)のように主体的な解釈が関与しているとは考えられない場合はナツテイルの文は使うことができない。(24a-b)も同様である。

この種のナツテイルの文の実例として、次のようなものをあげることができる。

(25) たくさんの尾根はたか山で一つになり、そのためここはいわば空中のハイウェイの交差点になっている。(沈黙の春301)

(26) この広い芝生のずっと先に、小さな森の繁みがあって、これがこの屋敷の境になっていた。(女の一生35)

(27) 小畠村の平均海拔は五五〇メートルである。三方を山で囲まれた高原の村で、広島県の東部を南流する蘆田川と岡山県にそそぐ小田川との分水嶺になっている。(黒い雨404)

(25)では、とらえられた現象に対して「空中のハイウェイの交差点」という機能が解釈されている。(26)では、客観的にとらえられる現象としては「小さな森の繁み」だけであるが、これに対して、「この屋敷の境」という機能が解釈されている。また、(27)も同様に「高原の村」に対して「分水嶺」としての機能が解釈されている。

4.3. 構成の叙述

3つめのタイプとして、ナツテイルの文がとらえられた状態の構成を叙述する場合をみる。まずは実例の観察から始めたい。

(28) 彼女が掻き登ったという熊笹は通れそうもないので、畑沿いに水音の方へ下りて行くと、川岸は深い崖になっていて、栗の木の上から子供の声が聞えた。(雪国177)

(29) 階段の下は、三畳ほどの小部屋になっている。(楡家の人々1350)

(30) ふかい松林にかこまれた西光寺の裏手は小高い丘になっていて、小道の突き当りに形ばかりの門が見える。(剣客商売115)

(31) そこは急傾斜で、二筋の尾根が並んで走り、その間は深い谷になっていた。(青春の礎93)

上の例はいずれも話者が視覚によりとらえた空間の構成を述べるものである(11)。これらは状態内部の差異を認識することによって、全体の構成を述べるものである。このようにみなす根拠として、次のような例をあげることができる。

(32)a 一脈に連なるA山とB山をよく見て比べると、A山の方がやや{高くなっている/高い}。

b エベレストと富士山を比較すると、エベレストの方が{?高くなっている/高い}。

(32a)は形容詞文とともにナツテイルの文がごく自然に使うことのできる例である。ここでは「A山」と「B山」が一つの視界を構成するものであることが明らかな文脈が与えられている。他方、(32b)における「富士山」と「エベレスト」は常識的に考えて一つの視界を構成するものとは解釈できない。このような場合は形容詞文がごく自然であるのに対して、ナツテイルの文は不自然である。つまり、一つの視界の中での構成としてとらえられるものでなければならないのである。

また、このタイプのナツテイルの文は状態の内部の差異を認識することによって構成を述べるものであるため、次のようなものも不自然である。

(33)a ?ここは富士山の八合目になっている。

b ?この本は彼の三冊目の著書になっている。

「富士山の八合目」や「彼の三冊目の著書」という叙述は決して状態の内部の差異に着目することによって得られた特徴づけではないために不自然である。

更に、このタイプのナツテイルの文は構成を有意義に叙述するものでなければ

ならないため、「X (ニ) ナツテイル」におけるXの部分は叙述の対象がどのようなものかを述べるものでなければならない。

(34) 階段の下は{六畳間の和室／??私の好きな部屋}になっている。

(35) 林のむこうは{流れの静かな小川／?桜川}になっている。

(36) ?中央に聳えるのは槍ヶ岳になっている。

(34)において「六畳間の和室」は自然であるが、「私の好きな部屋」は不自然である。前者は叙述の対象が視覚的にどのようなものかということ述べる上で有意義な情報であるのに対し、後者は他と区別する機能しかない。また、(35)において「流れの静かな小川」は自然であるが「桜川」はやや不自然である。「桜川」とは固有名の例としてあげたものだが、基本的に固有名はこの種のナツテイルの文になじまない。これは固有名が特別な文脈のないところでは他と区別する機能しかもちえないことによる(12)。 (36)における「槍ヶ岳」も同様である。

ここまででみてきた例は主に視覚によってとらえられた空間の構成を述べるものである。我々がとらえる空間の広がり、その内部の差異を認識することが容易である。しかし、空間構成の叙述以外のものでも「状態内部の差異の認識」という文脈を与えると成り立つことがわかる。

(37) a *このチームのユニフォームは青くなっている。

b このチームのユニフォームは肩の部分だけ青くなっている。

(38) a *彼の声はとても高くなっている。

b 今聞いた単語は最初の拍が高くなっている。

(39) *彼は性格がまるくなっている。

(37a)、(38a)及び(39)には単純状態の叙述としては解釈できないという意味で*を付している。もちろん、通常の変化の結果の叙述としては十分に成り立つものである。まず(37a)と(37b)の対比に注目してみよう。「状態内部の差異の認識」という文脈が与えられていない前者は単純状態の叙述としては解釈できないが、後者はごく自然に解釈できる。(38a)は聴覚によってとらえられる状態であるが、変化の結果の解釈しかできない。これに対し(38b)は同じく聴覚によってとらえられるものであるが、状態内部の差異の認識によって全体の構成を述べているので、単純状態の叙述として理解することが容易である。また、(39)は人物の属性について述べた文である。我々の認識のあり方として、このような属性をその内部の差異の認識から理解することは困難である。従って、この文は変化の結果を述べたものとしてしか理解できない。

以上、ナッテイルの文が状態の構成を述べる場合を概観した(13)。

4.4. まとめ

それでは本節における議論を次のようにまとめておこう。

(40) 単純状態を表すナッテイルの特徴：

単純状態を表すナッテイルの文は、叙述の対象を現実の時間軸上に展開される変化の結果として述べるのではなく、とらえられた状態の原因・理由、機能、構成を述べるものである。(14)(15)。

5. 変化の結果のナッテイルとの関係

それでは、本章におけるテーマである単純状態のナツテイルと通常の変化の結果のナツテイルとの関係などについて考えてみよう。

5.1. ナツテイルのスキーマ

変化の結果と単純状態のナツテイルの文の共通点として、次のような意味的構成のスキーマを仮定することができる。

(41) ナツテイルの文の意味的構成

[とらえられた状態] + [状態に対する解釈]

単純状態のナツテイルの文が上のような質的に異なる2つの意味的成分から構成されることは既にみたとおりである。しかし、これは変化の結果のナツテイルの文（さらには変化主体の動詞のテイル形の文のすべて）にも同じことがあてはまる。例えば、「グラスが粉々になっている」という場合、話者が現実としてとらえているものは「粉々の状態のグラス」だけであって、その状態に至るプロセスはあくまで話者が解釈しているものにすぎないということが言えるだろう⁽¹⁶⁾。

5.2. ナルの基本義と諸用法

(41)に示したようなナツテイルの文の意味の広がりの中で、原因・理由、機能、構成を述べる諸用法が認められるのはなぜだろうか。換言するならば、状態に対する解釈とはより具体的にはどのようなものなのだろうか。本論はナルの基本義は現実世界におけるなんらかの結果への到達のプロセス（変化）であると考えますが、この基本義が心内世界にメタフォリカルに拡張されたものと思われる。この

点を各用法ごとに検討しよう。

まず原因・理由の用法について考えよう。このタイプはとらえられた状態に対する原因や理由を解釈可能な場合に成り立つ。現実世界において変化のプロセスが生じたわけではないが、原因・理由の存在を認めることが当該の状態をあたかもなんらかのプロセスの結果生じたものと推論することにつながる。つまり、ある結果への到達のプロセスを我々は心内世界において認めているのである。

次に機能の用法はどうだろうか。このタイプはとらえられた状態に対する機能を解釈可能な場合に成り立つ。当該の状態に対してなんらかの機能を認めるということは、あるものを別のものとして認識するプロセスが心内に存在するということである。「これらの低木が道ばたの生垣になっている (= (23a))」という例で言えば、「低木」を解釈した結果、「生垣」として認めるという到達のプロセスを心内に認めるということである。このタイプも同様に我々の心内世界における変化を叙述するものとして理解することができるのである。

最後に構成の用法についてである。このタイプはとらえられた状態の構成を述べる場合に成り立つ。この場合、構成を述べるということは、当該の状態の内部に存在する差異を認識するプロセスが我々の心内に存在するということである。この差異の認識が変化の認識としてとらえられると理解するのは難しいことではない。「このチームのユニフォームは肩の部分だけ青くなっている (= (37b))」という例で言えば、「肩の部分」と他の部分の差異が心内世界での変化として認識されているのである。

このように、単純状態を叙述する3つのタイプのナツテイルの文は、意味拡張を動機づける条件という点では質的に異なるものであるが、いずれも変化という基本義の心内世界へのメタフォリカルな拡張の結果として理解されるべきものである (17)。

6. おわりに

本章は変化の結果を表さない単純状態のナツテイルの文について詳細に検討した。結論として、これらはとらえられた状態の原因・理由、機能、構成を述べるものであり、「なんらかの結果への到達（変化）」というナルの基本義が現実世界から心内世界へメタフォリカルに拡張されることによって得られるものであることを述べた(18)。

本章の議論との関わりの深い国広(1985)は、既に述べたように痕跡的認知という概念を提示している。本章が取りあげた単純状態のナツテイルの文をこの概念に則って述べるならば、「話者があたかもそうなったかのようにとらえている」ということになる。意味的に透明度の高いナルのテイル形を理解するためにはこの説明だけではやや具体性に乏しいと指摘したが、本章における議論は「話者があたかもそうなったかのようにとらえる」ための諸要因をより具体的な形で分析・記述したものである。また、Matsumoto(1996a)は単純状態を叙述する変化動詞のテイル形について考察し、なんらかの期待や基準からの逸脱として特徴づけられる *subjective change* という概念から説明を試みた。本章の分析も心内世界における「主観的な変化」ともいうべきプロセスを認めるという点でまさしくこれと軌を一になすものである。ただし、ナルという語彙項目に考察対象を限定し、原因・理由、機能、構成の解釈が可能な文脈が心内世界における変化を可能にする条件であるとの結論を得たものである。

本論は前章において、自動詞ナルが推論の動的プロセスを述べる場合があることを指摘した。この場合のナルもある種の心内プロセスに関わるものであるという点で共通するところがある。ただし、本章における考察対象がテイル形という限定された環境の中において見られるナルの意味の広がりであるという点では次

元の異なるものである。

自動詞ナルは意味的に透明度の高い語彙項目であり、日本語における自動詞的表現への指向の強さという要因も重なって、他の語彙項目には見られないような意味の広がりをもっている。今後もナルの様々なバリエーションの記述を進めるとともに、その全体像をとらえる作業が必要であると思われる。